

ドイツの学校心理士 ーその誕生と現在ー

手塚 知子* ・ 広瀬 信雄**

I. はじめに

ドイツの学校心理学や学校心理士について報告している，わが国の資料は数少ない。そのなかで，ドイツの臨床心理士について日本心理学会のワークショップで報告を行っている小林（2007）の資料には，ドイツの臨床心理士と学校心理士の違いが次の通りに記されている。

学校臨床の諸問題，たとえば教育相談の仕事は，ドイツでは心理療法士の所管には入ってきません。学校臨床に関しては「学校心理士」(Schulpsychologe)あるいは「治療教育家」(Heilpadagoge)といった全く別種の職業集団が担当すべき領域の仕事であって，心理療法士の担当すべき問題領域とはみなされないというのがドイツでは常識のようです。

わが国では，臨床心理士がスクールカウンセラーとして，学校内でも活用されているのに対して，ドイツでは疾患の治療に携わる臨床心理の専門家と，教育にかかわる学校臨床としての学校心理士は明確に区別されているといえる。

II. ドイツの学校心理学と学校心理士

以下，学校心理学ー学校のための心理学 (Handbuch SchulpsychologieーPsychologie für die Schule) (Fleischer, Grewe, Jotten etc, 2007) に沿ってドイツの学校心理学と学校心理士の歴史的な流れについて概観する。

1. ドイツの学校心理学と学校心理士のはじまり

ドイツに学校心理学の考え方を紹介したのは，ウィリアム・シュテルン (Willam Stern) である。彼の提議により，1922年マンハイム (バーデン - ヴュルテンベルク州の都市) で，

* 山梨県福祉保健部こころの発達総合支援センター

** 山梨大学教育人間科学部障害児教育講座

学校心理学が始動することになる。ドイツで最初の学校心理士は、ハンス・レンメルマン（Hans Lemmerman）である。

レンメルマンは、いわばスクール・キャリア・コンサルタントや個別相談、職業相談、教育システムの相談、そして子どもの行動評価を行なった。また彼は、教師や市の職員と連携して働いていたことが記されている。

一方でハンブルク州においても、マンハイム市とは異なる背景で学校心理士が1931年から活用されていた。ハンブルク州では、叱責や処罰といった児童生徒管理の色合いが強い学校での対応のなかへ、学校心理士が導入されたことが記されている。

しかしファシズムの時代（1920年代後半から第二次大戦中）には、社会的な混乱の中で学校心理学は影をひそめ、そしてレンメルマンの培ってきた研究やデータは優生学的な判断のために用いられることになり、この時代は学校心理学にも暗い影の時代となる。

2. 戦後の旧西ドイツでの学校心理学

1949年から1990年10月3日までドイツは、かつてアメリカ・イギリス・フランスに占領された西ドイツ（ドイツ連邦共和国）と、ソ連に占領されていた東ドイツ（ドイツ民主共和国）に分離していた。西ドイツの学校心理学の動向としては、1950年以降に、アメリカやイギリスの影響を受け、教育に関する相談所が徐々に設立され、そして学校心理学に関するポストが用意されるようになった。

1956年から1972年にかけて、教育政策の改革が積極的に実行され、教育に関する相談所や相談体制が各地に整備された。学校心理士の人数は補強される施策が行なわれた。

1980年代には、財政的な課題から、教育政策の改革は学校構造改革議論へと転換するが、教育相談を含めた学校心理士たちのポストは守られた。その後、学校の進路や教育に関わる事柄は相談にあたる教員（Beratungslehrer）に任され、学校心理士の対象は一人ひとりに向けた個別の支援になっていった。

3. 戦後の東ドイツの学校心理学

ソ連に占領された後、東ドイツは社会主義へと転換した。そのため東ドイツの教育も、それまでの州ごとの所管ではなく、中央集権的に行なわれるようになった。学校心理学の概念は、東ドイツには存在しなかった。しかし、“教育的危機指導室（以下、PKKとする）”に所属していた心理士と呼ばれていた職種が、学校心理士の役割と同様であったことが指摘されている。

PKKの心理士は、ライプツィヒ大学（ザクセン州のライプツィヒ市にある1409年設立の大学）で、教員免許状と教育学士の学位を持ち、教育心理学を専攻しなければならなかった。

PKKの心理士の役割は、教員の研修や実技訓練、資質や技術の向上のための専門的な知識の伝達、また教員をはじめ、教育に関わる者が持つ課題や問題を解決することであっ

た。これらの役割は、東ドイツのPKKの心理士たちにとっては雇用につながるポストとして価値あることであった。

しかし、1979年には、社会情勢の不安定さとともに初等教育での仕事は政治、経済的な理由から抑制されるようになった。だがその翌年、フリードリッヒ・クリックス（Friedhard Klix）が長を務める心理学の専門家による国際会議が、東ドイツで開かれたことにより、再び学校心理士のポストは安定していった。

学校で働く心理士たちは、促進学級（日本の特別支援学級にあたる）に携わるようになった。特に、今日と比較すると、東ドイツの心理士たちは幼稚園での早期教育と早期鑑別に関わっていた。また、教員に対する資質や技術の向上にも心理士が関与していたと考えられる。

4. 統一後のドイツの学校心理学

1990年の統一に向けて、東ドイツの学校心理学は西ドイツの学校心理学に、しだいに統合されていった。統合される際には、それまで西ドイツで行なわれていたハンプルクモデル（社会教育に重点をおいた学校心理学）とヘッセンモデル（学校教育的な視点を重視した学校心理学）の長所や短所といった事項を含めて、様々なことが話し合いによって一致点を見出すことが試みられた。統一後、学校心理士は教員や学校に対して有効な働きかけができることが再確認されていった。

西ドイツの学校心理学でも、統一の10年ほど前から個別の相談や教員への研修が行なわれていた。教員への研修では、児童生徒との関係づくり、知識の伝達、能力の開発、教授技術、そして保護者の協力を得る技術といった内容が取り上げられ、教員のバーンアウトを防ぐことができるとされた。

そうした役割を持つとされる学校心理学は、現在では、ほとんどすべての州で独自の役割を持っているといえる。

5. 各地域での学校心理学の取り組み

次に各地の特色ある取り組みをあげておこう。

ケルン市（ノルトライン・ウェストファーレン州の都市）では、小学校や全寮制学校（Heimschulen）、補助学校（Hilfsschulen）での個別相談が、市内の教育に関する相談所に持ち込まれている。教育に関する相談所の学校心理士たちは教員だけでなく、教員集団や校長とも連携して、問題の解決にあたっている。

ノルトライン・ウェストファーレン州では、学校心理士が教科指導の専門家として、教育庁で雇用されている。

ハンプルク州には、現在16の地域に教育に関する相談所が整備され、学校心理士はそこで教員や社会教育主事（Sozialpädagogen）とともに児童生徒の支援を行なっている。ハンプルク州での学校心理士の役割は、学校外の機関との連携や個別相談、学校での進

路相談、授業のつまずきへのサポートである。また、教員や校長そして学校管理主事（Schulaufsicht）への定期的な助言を行なう。そして学校心理士は、学校での研修にも参加をしている。

マンハイム市では、教育に関わる相談所が配置され、個別の相談が行なわれている。またマンハイムを含むバーデン - ヴュルテンブルク州では、個別の相談への対応を行なっている相談所が23か所以上に整備されている。学校心理士たちの役割は、教員や校長のための研修などの実施である。

バイエルン州では、州の相談所に相談にあたる教員を配置している。学校心理士たちは、教員や校長のための研修を組織し、問題が学校で生じないように予防的な援助を行なっている。バイエルン州にあるバンベルク大学では、学校心理学を専門とする教員が育成されている。また、バイエルン州の学校心理士は、学校発展助言者（Schulentwicklungsberater）として児童生徒や保護者、教員や校長のみならず、必要な場合には学校管理主事に対しても助言を行ない、他の相談機関とも連携をとっている。

三つの都市州（ベルリン、ハンプルク、ブレーメン）を別として、学校心理士は基本的には州の公務員とされる。そして、教職関係の諸機関と同等の地位や立場で任務にあたっている。

ドイツの首都であるベルリンは、全校生徒数に対する学校心理士の人数が調整され、多くの学校心理士が雇用されている。学校心理士のほかに、相談にあたる教員もまた活躍している。ベルリンの12の地区の各々には、学校心理学に関する相談センター（einschulpsychologisches Beratungszentrum）が設けられ、児童生徒の相談にあたっている。ベルリンの学校心理士の役割は、個別相談や学校システムに関する相談と助言である。2001年には、暴力予防と危機管理のための学校心理士チームが組織されている。

学校で生じることは、学校の中であるいは、校内体制の中で生起している。そのため学校心理士は、個人に焦点づけた視点と校内体制に焦点をあてた視点から対応することが、大切とされている。

6. 新たに期待される学校心理士の役割

OECD（Organization for Economic Cooperation and Development）の学力到達度調査PISA（Programme for International Student Assessment）（以下、PISA）は、学校心理学や学校心理士に新たな職務領域を提供した。例えば、PISAの成績の低さは、すべての州で学校での対策プログラムの作成を余儀なくした。その作成に学校心理士たちは関わっている。取り組みの立案に関して、学校心理学の専門家たちは、診断や研修に関わる計画や、連携や協力体制の構築など包括的な立案に参画している。

またPISA実施国のなかでドイツの学校心理士と児童生徒との割合は、他の諸国と比較すると、学校心理士の人数は児童生徒に対して少数である。そのため学校心理士の人数を、ヨーロッパ諸国の一般的な水準に向上させることが緊急の課題とされている。

学校心理士は、現代の授業形態のための大きな供給（提案）レパートリーを持っているとされ、また学習の本質と関わるものであり、そして多様な能力、そしてサポーター的な専門家とされる。つまり、学習面と深くかかわることが期待されていることを大きな特徴として読み取ることができる。

Ⅲ. 結びにかえて

以上を概観すると最初の学校心理学の提起者は、ウィリアム・シュテルン（William Stern）、学校心理士はハンス・レンメルマン（Hans Lemmerman）であった。

学校心理士の行なっていた初期の実践は、いわばスクール・キャリア・コンサルタント、個別の相談、職業相談員、教育体制相談員、そして個人の行動評価者の仕事であった。またその当時から、教師や市の職員と連携して役割を果たしていたことがわかる。

第二次大戦後、西ドイツでは欧米型の思想の下、教育に関する相談所が各地に配置された。また学校心理士の役割も、ハンブルクモデルやヘッセンモデルなど、さまざまに展開されていく。その後、1980年代になると学校の進路や教育に関わる事項は相談にあたる教員に引き継がれ、学校心理士の役割は個別相談に移っていく。

東ドイツでは、学校心理士は存在しなかったと指摘される。しかし、東ドイツの学校心理士に相当すると考えられる役割はP K Kの心理士たちが担っていた。P K Kの心理士たちの役割は、教師の研修や訓練の組織、授業や教育への専門的立場からの助言、また教師をはじめとする教育に関わる者が持つ課題や問題への取り組みであったとされる。つまり、西ドイツでは児童生徒を中心に据えた児童相談所や個別支援に重点があるが、東ドイツの場合には、教師や授業に関わる支援が主な仕事となっていた。

また、ドイツの学校心理士は必ずしも、学校に所属して学校内で活動を行なっている訳ではない。つまり学校心理士は、州職員や地方公務員として、教育庁に勤めたり、各地区の相談所で勤務して児童生徒の相談や援助にあたっていることが読み取れる。

しかし、ドイツの学校心理士の場合には、「学校心理士」というポストとしての職があり、学校内での助言や支援に限定せず、学校管理に関わる教育相談を受ける職として認知されているのではないかと推測される。

学校心理士の役割は、個人に焦点づけた視点と、教育全般に焦点づけた視点の両方から個別相談に対応したり、また校内体制についての助言を行なうなど、多岐にわたっている。

近年、P I S Aの成績がドイツで低迷しているという現状は、ドイツの学校心理士の役割を強調し、いっそう学校心理士のポストの重要性に関する議論と結びついている。

このようにドイツの学校心理士に求められる役割は、時代や地域により異なる。わが国の学校心理士の歴史はまだ浅く、アメリカをモデルとしている（石隈，1999）。ドイツの学校心理士の役割は、今後わが国の学校心理士の活用を考える際の一助となるのではないかと考える。

文献

- 1) Thomas Fleischer, Norbert Grewe, Bernd Jotten, Klaus Seifried, Bernhard Sieland (Husg.) (2007) Handbuch Schulepsychologie. –Psychologie für die Schule–. Kohlhammer W.
- 2) 石隈利紀（1999）学校心理学－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス．誠信書房．
- 3) 小林亮（2007）ドイツにおける心理療法士－資格制度とその活動状況．日本心理学会，ワークショップ資料．
http://www.human.ritsumei.ac.jp/hsrc/resource/series/10/open_research10_004-018.pdf